



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeiki@kib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

説経浄瑠璃節中興について

説教とは元来「説経節」のことであり、仏の教えをわかりやすく説明するために、節をつけて説いたのが初まりである。現在も寺院で行われている説経節がこれである。

一方では宗教を離れ、芸能として発達した説経節もある。中世以来令和の今日まで語り継がれている『山椒大夫』や『葛の葉』『照手姫』などの物語がそうである。

説経浄瑠璃という言い方は、説経節が廃れた頃、浄瑠璃を取り入れることにより、何とか息を吹き返して以来の言葉である。そのことにつき『風俗画報』第二五六号が考証しているで紹介する。

説経節一名源氏節(承前) 説経節が享保の末に至りて中興について 翠雨 浄瑠璃節の盛むるに伴って

門せつきよう

(人倫調蒙図象)



之を伝ふるもの稀にして微したり 現今の源氏節に手じたる美矢登司は家事の都合に大阪の片辺や田舎地方踊りと称し演劇様のものをにて既に北海道に渡り同地に門説教歌祭文とて名残を舞はしむるは実に先代美矢は在らざりし 美左松が斯とどめありしが今を去る四登司が斯道の日々に□れ往々全盛を極めて其の門に来た十年許り前(一九〇〇年頃)起るを歎じ 斯くは考案を為りて学ぶもの日に多く彼算に名古屋に岡本美根太夫(みねお)し扱めたるに因るものなり の社会に於ては□然として頭なるものあり 説経浄瑠璃 故に美矢登司は斯道にお角を見はし勢力おさおさ當を語る門人岡本美矢尾太夫 ける中興の祖と云ふも 敢る可らず 於是美左松大に傲及び美矢登司等技芸尤も秀て賞め過ぎた訳にあらず 慢を生じ 自ら説経浄瑠璃で当事蟬丸宮別当所より一 現今の美矢登司は先代美矢 元祖岡本美左松と稱し招牌を流の免許状を得たり 其写 登司の養女なり 説経節 掲げたるに同業中より紛擾関清水蟬丸宮末流説経祭にては曲折の最も正しき片なりとの噂あり

文岡本美矢尾太夫

右免許如件安政五年正月

元祖争ひ

この免許状は往昔より蟬 明治十二年の頃同じ名古屋丸宮別当所より附与さるに筆作りを以て微かに世渡る事に為り居るなり 正りを為し居る某あり 娘せ徳の頃の口宣受領(官符)き将来音曲を好む 或師にの控書にも日暮小太夫が 就て説経浄瑠璃を学ぶ 天撤去しめたりと云ふ 然れど総目免許を受けたること □の器才 上達速やかに加ふるに嬌声浪浪として玉□を転ばすに似たればとて 倭に倭にたたとへ世人の賞揚斯くて美矢登司が語りのみ 大方ならず 当事名古屋にては興味少なく随つて人 席亭弘法座に於て興行せり々に考案を凝らし明治五年 おせきは此の時芳紀将に二始めて首振りとして人間をし 芸名を岡本美左松と呼て人形の真似を為さしめ語むで初めて此の座に顯れしりに合はして舞わしめたる 時は技芸の妙と声音の美 両ことあり 芝居で云ふ人形々端なく人氣を惹き毎夜の振りなり 之に因りて多少 大入り立錫の余地もなき程顧客の目先を新たにし人氣に在りしと其の際名古屋にもつきたれど まだ充分の在りて親しく見聞したる人趣味を添へざりしと云ふ の語れり

されば首振りを廃めて全然 当時明治五年来多少の面目演劇の如く口跡をつけ舞わを換えて人氣回復の策を講

附言

説経節の名称時代に より種々に唱ひたり 単に説経節と云ひしことあり

又説経語、説経浄瑠璃節、門説教、説経源氏節年代により多少曲節の差ありと雖ども大概同一なるものと知るべし 文中種々の名称を用ひあるのみならず浄瑠璃節と混ざるの